校長室の窓から

成長する子どもたち!!
「責める」「放る」→「注意する」「許す」姿

今年度も終わりに近づいてきて、子どもたちの成長の姿が様々な場面で見られています。今回は、友だちとの関わりの中から、その姿を紹介します。

４月から５月、新しい係が決まり、新しい先生との生活の中で、今までのシステムも多少変わったせいか、「何しょうるんよ。ちゃんとしんさいや。」「何で宿題出さんの。早く出しんさいや。」「ここじゃないでしょ。こっちに出すんよ。何回言ったらわかるん？」と、厳しく友だちを**『責める』**姿が何度か見られました。しばらくすると、何度言っても直らないので、あきらめて、「いいよいいいよ。何回言っても聞いてくれんのじゃけえ。」と、**『放っておく』**姿が少しずつ見られるような時期がありました。しかし、**『責める』**子も**『責められる』**子も、**『放っておく』**子も**『放っておかれる』**子も、そんな人間関係が面白いはずはありません。でも、相手に言いたいこと、自分が主張したいことはあるのです。そうした**「自分の思いを相手にわかるように伝えること」**は、**「相手の言い分もわかろうとすること」**にもつながるのです。だから、時に、学校で教職員が子ども両者の言い分を聞き、それをわかりやすく相手に伝える場を設けることがあります。すると、だんだん、子どもたちは、相手の善くない行いを見つけたときも、きつく**『責める』**のではなく、「そんなことは、しないほうがいいと思うよ。」「そんなことは、～～じゃけえ、もうやめて、〇〇をしようや。」などと、上手に**『注意をする』**姿が見られるようになってきたのです。すると、**『注意する』**子も**『注意された』**子も、すっきりした感じになってきたようです。**『放っていた』子**も、「今日は、〇〇ができていなかったけど、何かあったのかな。今は言わずに、ちょっと見ていて、あと２・３日たって，〇〇ができていなかった理由を聞いてみようかな。」「今日は、昨日よりよくなっているから言わないでおこうか。」なんて、その時は、**『許して（許容して）』**、あとで話をする姿も、高学年では多く見られました。

ご家庭・地域でも、子どもたちの言動に対して、「なぜできないのかなあ。」と見られている方も多いと思います。家庭でも、何回言っても同じことを繰り返すこともあろうかと思います。それでも、粘り強く『注意したり』、時には、どうしてそんなことをするかをわかろうとして、程度によっては『許したり』することも必要なのではないかと思います。

子どもたちは、少しずつ成長しています。その成長のために、どんな声かけをすればよいか、見守ればいいかを、学校・家庭・地域でともに考えていきましょう。何卒、ご協力をよろしくお願いいたします。

校長　　田　丸　　栄